クロスロード新聞

第32号

2011年8月7日

夏のいろいろ
大学院生が、小学生が取り組む
クロスロード

発行元：108-8345　港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局

大学院生がクロスロード

愛知教育大学の杉浦先生より、中京大学大学院生が作成したクロスロード問題をお送りいただきました。2ページにに紹介します。杉浦先生は、授業でクロスロード問題作りを継続的にされています。

ことしは神戸編・市民編をやった翌週に，愛知教育大学の2006年度のクロスロード集を配布し、それを各自で選んでやってみた後自分で問題をつくるという形でまとめられました。専攻は臨床心理学の学生が多いため、問題の内容もその問題意識を反映しているかもしれないということです。

問題だけでなく、イエスとノーの問題点、それから解説にも興味深い内容が満載です。問題もどれも力作ばかり。今回次回と2回に渡り連載しますので、じっくり読んでくださいね。

杜の都のクロスロード&ダック

新聞でおなじみの仙台「わしん倶楽部」の田中勢子さんから仙台の福祉委員研修会と小学校でのぼうさいダック・歩一歩たいそうの実践をご報告くださいました。３ページにご紹介をしています。なお、早くにご報告頂きながら、事務局の手違いで掲載が遅くなってしまったことをお詫びします。

このご報告をいただいた後、東日本大震災が起こりました。取り組みが行われ>た若林地区をはじめ仙台では甚大な被害が出ました。犠牲者のご冥福をお祈りするとともに、被災者のみなさまに心からお見舞いを申し上げます。

東日本大震災で延期になっていた「歩一歩たいそうずーずー弁バージョン」のCD化も、再度実現へ向けて進行中とのことです。

ソナエーター復活！

ソナエーター連載、約1年ぶりに復活です。

東日本大震災をきっかけに、日頃の備えを見直された方も多かったと思います。今回は、そんな都会の女子のおしゃれなソナエーターに登場いただきました。

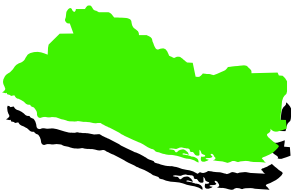
防災やっているとマニアックに見えるよねえ、と、半ば自嘲気味に始まったこのコラムですが、いよいよ国民運動に発展の予感。

最近ソナエーターになった方も、もともとソナエーターの方も、これを機会に是非投稿を！

エルサルバドルでぼうさいダック！

エルサルバドルでぼうさいダックを活用されている青年海外協力隊の中野さんから詳細な報告をいただきました。

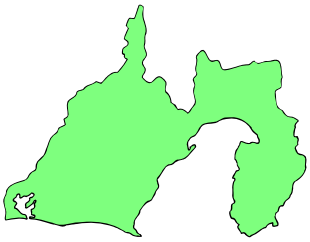
中野さんは新聞形式にしてレポートを送ってくださったので、そのまま掲載いたします。レイアウトもすばらしい！ワザを是非見習いたいと思います。



目次

ニュースいろいろ　1
大学院生がクロスロード　2
進級認定　2
杜の都のクロスロード＆ダック　3
啓発で伝わっているつもりが　3
ソナエーター(16)　4
こんなところに心理学(32)　5
透明性の錯覚　5
エルサルバドルでぼうさいダッ　6-8

クロスロード次号のご案内
発行予定日：
2011．9．30.
クロスロードのつどい開催決定！詳細は次号で。



責任編集

- チームクロスロード
- クロスロード・サポーター
- SPECIAL THANKS:
  高知県南海地震対策課
  小溝智子（漫画企画）

大学院生のクロスロード(中京大学編)

【問題】
　友人と花火をしようと前から決めており、そのために友人が花火から場所まですべて準備をしてくれた。しかし、その場所は花火禁止であり、やぶった場合は厳しく罰せられる。友人はそれを知っていてバレなければ大丈夫でからやろうという。たしかにその場所は郊外で特に通報されそうな場所ではない。花火をやる？やめる？

【YESの問題点】
・もし、見つかったら罰をうけなければならない
・火事になる可能性もある
・警察沙汰になったら困る
・モラルに反する

【NOの問題点】
・せっかく友達が用意してくれたのに無駄になる
・約束を破ることになる
・友達を裏切ることになる
・他にできる場所をさがせる保障はない

【解説】
　これは実際に筆者が去年の夏に地元の友達との間で経験した問題である。夏休みに入るまえから花火をやるということを約束していて、2人とも楽しみにしていたが、その場所は花火を禁止している場所でルールを守るか友達と一緒にルールを破って楽しむかという社会規範と友人との関係についてのジレンマである。筆者自身は、その時は友達と一緒に花火をやった。それは郊外の周りに家もなく広い空き地だったからである。ちゃんと水も用意し、安全にも気を使っているから大丈夫だろうということからだった。しかし、人によってはルールを守るべきだろうという人もいるだろうし、警察沙汰になったら困るという理由でやめるという選択もあるだろう。この問題の場合、友達はやろうと花火に乗り気なのに自分だけやめるのは自分だけ助かろうとか、付き合いが悪く友達がいのないやつだ、という自分の評価が下がってしまうのではないかということも考えてしまう可能性がある。ルールは大事だが、人はどの程度までそのラインを越えて楽しんでよいかを考えるのではないだろうか。

【問題】
あなたは「販売のアルバイト」です。
お客様が以前購入したものを「サイズが合わなかったから返品・返金してほしい」と言ってきた。今日は売上が悪いうえ、販売マニュアルには『返品は基本的に受け付けてはいけない』となっている。
返品を受け付け返金する？

【YES（返品を受ける）の問題点】
・売り上げがマイナスされる
・マニュアルに反する
・社員から叱責されるかもしれない

【ノー（返品を受け付けない）の問題点】
・クレームにつながる
・お客様の気分を害する
・お客様が来店したくなくなるかもしれない

【解説】
　これはバイト先で実際に起きたことであり、その時はマニュアルに従ってお客様に「基本的には受け付けておらず、どうしてもの場合は同等の値段の商品と交換となっている」とアナウンスした。しかし、お客様の表情が厳しく、気分を害されていたようだった。自分では対応は無理だと感じ、社員を呼びに行き対応してもらった。結果はクレームにつながる可能性から返金を受け付けていたようであった。
　返品を受けた場合、販売にとっては売り上げが重要であるので、その日の売り上げが以降の売り上げや経営に影響するかもしれない。また、マニュアルに反することで社員に迷惑をかけ、叱られることもあるであろう。
　返品を断った場合、この時のようにお客様の気分を害してしまいクレームになる可能性が高い。また、この対応によってお客様が二度と来店してくれないかもしれない。
　ここではアルバイトという弱い立場であることがポイントとなる。この場合は社員に対応を任せるのが店にとってもお客様にとっても最善の対応だと考えられる。しかし、アルバイトという立場でも自分で考えて行動しなければならない。

ファシリテータ進級認定！

以下の方を**中級**に認定いたしました。(敬称略)

サントリーホールディングス株式会社
コンプライアンス室　　近藤恵美

【応募先】108-8345
港区三田2-15-45
慶應義塾大学商学部　吉川肇子研究室内
クロスロードサポーター事務局
電話：03-5427-1251　ファックス：03-5427-1578
メール：kiikkawa@aoni.waseda.jp

電子投稿はこちら↓
http://maechan.net/crossroad/toukou.html

杜の都通信～クロスロードとぼうさいダック

災害時に備えて～日頃の福祉活動の大切さを考える～

２０１０年８月３日（火）ＪＡ仙台　六郷支店で「六郷地区福祉委員研修会」が若林区社会福祉協議会・若林区ボランティアセンター主催・六郷地区社会福祉協議会共催で開催されました。参加者は六郷地区の福祉委員・民生委員・町内会長の方々で９０名です。

ゲームの問題は、仙台市若林区社会福祉協議会の伊師洋香さんはじめ六郷地区福祉委員
役員の方々が、地元福祉員さん向けに作成したものを使用しました。私自身、地元にかかわる問題作成から参加したのは初めての経験で今回はファシリテーターとして多くの気づきを得る研修となりました。

注：「福祉委員とは？」　昭和60年仙台市社会福祉協議会が国の補助「ボラントピア事業」の指定を受け、各地区社協会長から委嘱され、各地区活動の担い手「ボランティア」（小域ネットワーク事業の「声掛け・見守り活動」「生活支援活動」の推進役等）となって頂く方の呼び名です。

＜参加者の意見＞
・はじめてこういう形式のゲームを行いましたが、みんなが一緒に考えられるゲームであると思います。
・クロスロードを学びながらみんなの意見が聞かれとてもためになった。
・婦人防災クラブでもクロスロードの研修会を行って防災の助けになればと思います。
・深く考えると、どちらとも言えない時が多いと思う。その時と場合による判断が必要。
・全部が気になる問題が多く判断の判定の難しさに問題があるのではないかと思われました。

―親子で楽しむ防災教室―

2010年9月13日（月）仙台市立新田小学校体育館で、学年行事「親子で楽しむ防災教室」を行いました。参加者は、生徒・ご家族・先生　約280名です。

昨年より「ぼうさいダックゲーム」では種類を増やして行いました。内容は「地震・火事・誘拐・ハチ・かみなり」の5種類です。子供たちは、「ゴロゴロカミナリが楽しかった」と言っていました。

「歩一歩たいそう」では（地震・火事）を行いました。私の勉強不足ですが当日になって「うさぎとかめ」を知らない子供たちがいる事を知りました。幸い呉市社会福祉協議会制作のＣＤとＰＴＡの役員の方々が模造紙に歌詞を書いて下さっていましたので、無事防災教室を進行できましたが、童謡を知らない子供たちがいる事を寂しく感じました。

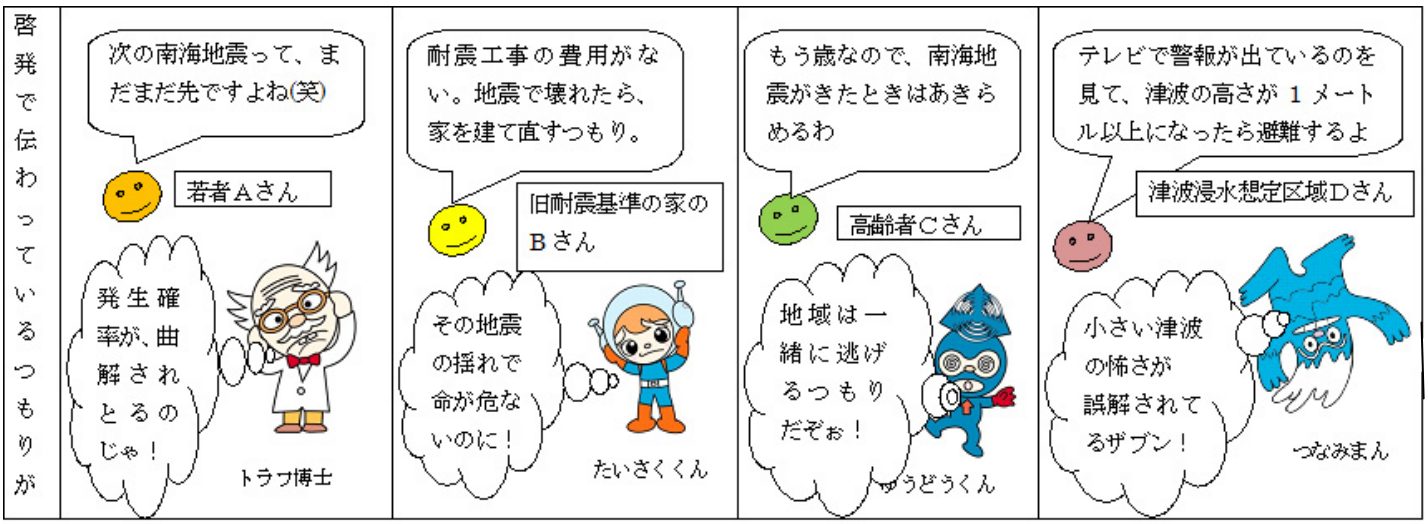
また仙台市立新田小学校のホームページ「子供いきいきブログ」カテゴリー1年生9月13日版に当日の模様を掲載してくださいました。
http://www.sendai-c.ed.jp/~sinden/pp_blog/index.php?UID=1284355950

最後に、福祉委員研修会の企画実践にご協力いただいた若林区社会福祉協議会・六郷地区福祉委員の皆様、および、防災教室を企画・運営して下さったＰＴＡ役員はじめ仙台市立新田小学校の皆様には心より感謝いたします。

(記事はともに、わしん倶楽部　田中勢子さん)

啓発で伝わっているつもりが

高知県防災キャラクター©やなせたかし



ソナエーター（16）おしゃれな女子のソナエーター(2)東京編

最近、デパートやファッション誌の付録などでよく見かけるようになったバッグインバッグ。名前だけ聞いても「？？？」な方もいらっしゃるかもしれませんが、お昼時にOLさん達が小さくて可愛いバッグを手にランチに繰り出す姿を見かけられたことはないでしょうか。あれがバッグインバッグです。

私自身はもっぱらお財布片手に、あるいは、ポケットに裸銭でコンビニへランチを買出しにいく毎日なのですが、実は先日、密かにバッグインバッグデビューをいたしました。といっても私のバッグインバッグはこちら。（写真１参照）防災キットです。とてもおしゃれ女子ランチに持っていける代物ではないのですが、３月１１日の地震以降、通勤かばんやお出かけバッグに入れて持ち歩いています。もともと、防災関連のイベントで見かけて入手し、会社の引き出しにしまっておいたものなのですが、今回の地震で、会社にいる間よりも屋外滞在時の備えが必要だと感じて持ち歩くようになりました。

中身はというと、最初から入っていたのが、LEDライト、ホイッスル、５徳ナイフ、エマージェンシー・ブランケット、絆創膏、めん棒、ソーイングセット、防災の心得（冊子）。自分で追加したものが、マスク２，３枚、ビニール袋、携帯電話のバッテリー、充電式電池（単４、LEDライト用）、常備薬です。（写真２参照）

この中で地震当日に活躍したのはLEDライトです。午後１１時を過ぎて一部の地下鉄の運行が再開されたので、自宅まで７ｋｍのところにある中間駅から徒歩で帰宅することにしたのですが、暗い夜道で手元の地図を確認するのに外灯の明かりでは足りずLEDライトがあって助かりました。あと、出番はありませんでしたが、ホイッスルと５得ナイフが手元にあったのは、一人で帰宅していた時に防犯の面で心強かったかもしれません（笑）。

日常生活の中で出番が多いのは、やはり携帯電話のバッテリーです。仕事で外出の多い日などには夕方近くにバッテリーを交換するのですが、地震直後は電話がつながりにくい上に、何度も電話やメール送信を試したりするので、電池の消耗が早かった覚えもあります。回線が復旧したのにバッテリー切れで連絡が取れなかった、という事態にならないよう携帯電話のバッテリーは常に持参しておきたいなと思っています。逆に出番が少ないのは、５得ナイフです。携帯されている先生方から「飛行機に乗るときには気をつけて！」とご忠告をいただいていたにもかかわらず、つい忘れてしまい、２度ほど空港から自宅へ郵送するはめに。。。ちょっと重量もあるので、今後も持ち歩くかどうか、ちょっと悩ましいところです。

クロスロード新聞にも登場されている仙台の田中さんの「セイボウ・セット」を実際に見せていただいた際には、「こんなにたくさんのものを常に持ち歩くのは、重たそうだし、面倒くさいなぁ」と思っていたのですが、今、自分でこの防災キットを持ち歩けているのは、自分にとっての必要性と重さの両方のバランスがちょうど取れているからだと思います。それに、マスクや携帯電話のバッテリーや、絆創膏など、普段から持ち歩いていたものがこのバッグの中に整理できるので、かばんの中がすっきりしています。これは私が防災キットを堂々とバッグインバッグと呼べる所以。ただ、もう少し可愛いらしくて、防災キットの中身を収納できる機能的なバッグインバッグが欲しいのが本音。もう少し落ち着いたら、デパートをはしごして探してみたいと思っているところです。

（東京海上日動リスクコンサルティング
伊藤めぐみさん）

写真１：コンパクト（手のひら２つ分）な防災キット

写真２：防災キットの中身

こんなところに心理学（30)：伝わっているという思いこみ

コミュニケーションを上手に進めていく上での前提の1つに、相手との共通の基盤がある、という点があります。「相手と話が通じない」とか、「相手が理解していない」と思うことってよくありますよね。そういうときに、私たちは話し方が悪いとか、相手の理解力がないと考えがちですが、実は「共通の基盤」がないために話が通じないということが結構あるのです。

まずは、次の文章を読んでみてください。

「進め方は簡単である。まず、ものをいくつかの山に分けていく。少量の場合は1つの山でもよいが、一度のあまり多くやりすぎないほうがいい。むしろ、少なめにしたほうが後悔はしないだろう。一山30分くらいで作業は終わるのだから。昔は1つずつ行ったのでずいぶん時間がかかったが、今はたいへん楽になった。いずれにせよ、この作業は生活の一部である。人によって必要性を感じる度合いは異なるかもしれないが、将来ともなくなるとは考えられない。」（Bransford & Johnson (1972)、 翻訳は岡本(2010)による）

ん？何のこと?と、意味がわからない方が多いと思います。そういう方は何度も読み返してみてください。わかるようになりましたか?

わからない方、実はこれは「洗濯」について書いてある文章なんです。で、もう一度文章を最初から読み返してみてください。今度はスッキリおわかりになったと思います。「洗濯」についての文章と知る前と知ったあとで文章が変わっているわけではないですよね。でもこれがどういう話か、と知るだけで格段に文章がわかりやすくなったことと思います。

相手との話も同様です。相手と話の共通の基盤がない状況、これは先ほどの文章を洗濯の話と知らずに読んでいるような状況です。でも相手に「私はこれから洗濯の話をしますよ」と前置きして、話したらどうでしょう?これが、相手と共通の基盤を確認した上で話すということなのです。相手が話を理解していないナー、と、感じられるときには、「話の前提となる知識」(共通の基盤)の確認をしたかな?と、意識してみてくださいね。

ところが、この共通の基盤、実は意外とくせ者なんです。共通の基盤はもうあるよね、と疑ってかからない場合があるのです。このような現象を心理学では「透明性の錯覚」といっています。

「透明性の錯覚」というのは、要するに、「自分の気持ちが実際以上に相手に知られている」と思うことをいいます。以前「サトラレ」というドラマ(漫画が原作)がありましたが、実際にはさとられていないのにもかかわらず、そのサトラレ感覚を持つ、のが透明性の錯覚の意味です。

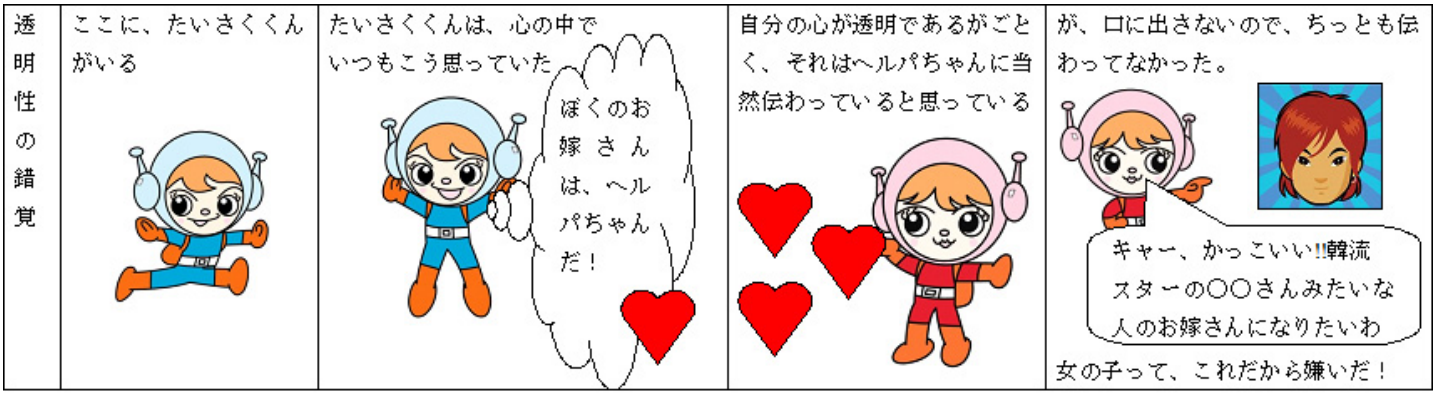
現実には自分の考えていることを他者が知ることってそんなにないですよね。でも、伝わっているように錯覚してしまうと、「伝わっているはず」という誤解が修正される機会がないのです。

透明性の錯覚が事故を引き起こす場合もあります。2006年のJR東海の踏切事故です(岡本、2010)。事故のあった踏切では遮断機が下りたままで警報が鳴っていたのですが、「こしょう」というサインが出ていました。みなさんならこの状況をどう解釈しますか?ある女性は「遮断機が故障して下りている」と考え、遮断機を持ち上げて踏切を渡りました。不幸にもそこへ列車が通過したため、はねられて亡くなりました。この事故に際してJR東海は「こしょう」というのは「トラブルを通報して欲しい」という意味だと主張したとされています。これは、「こしょう」の意味がお互いに違っていることに気付かないままに起こった悲劇といえるでしょう。

透明性の錯覚は、親しい間柄で特に起こりやすいといわれています。そうなると、確認して修正することも少なくなるので要注意です。防災講習を何度もやったからもうわかっているはずと思い込まずに、共通の基盤に立っているかどうか、「はっきり口に出して確認しなきゃ」と考え直すくせをつけましょう。

透明性の錯覚

高知県防災キャラクター©やなせたかし



防災ダック エルサルバドル版

文責
エルサルバドル国
青年海外協力隊員
中野元太

エルサルバドルの防災隊員

中米の小国の中でも一際小国、面積は四国ほど、人口は兵庫県ほどというエルサルバドル国で、三名の青年海外協力隊員が防災をテーマに活動している。ここエルサルバドルでは地震あり、津波あり、火山あり、熱帯低気圧あり、洪水あり、地すべりあり、と自然災害が頻発する地域に位置、一九九八年にはハリケーン・ミッチがエルサルバドルに甚大な被害を与え、二〇〇一年には一月十三日と二月十三日に大地震が発生し、一〇〇〇名以上の方が亡くなった。

エルサルバドルの位置

（外務省HPhttp://www.mofa.go.jp/mofaj/area/elsalvador/index.html）

自然災害が多発するエルサルバドルでの青年海外協力隊員（以下、防災隊員）の活動は主にコミュニティに焦点が当てられている。ここで三名の防災隊員について紹介しよう。

〈坂口由華〉ラ・リベルタ県サラゴサ市役所環境課配属

サラゴサ市は首都から南西に一五キロほど、土砂災害が多い地域で洪水も発生する。日本では社会福祉協議会に勤務しその災害マネージメントノウハウをここでも発揮。

〈加藤留未〉ラ・パス県サンルイス・タルパ市役所環境課配属。太平洋に面し、洪水や土砂災害が発生しやすい地域。スペイン語学科卒業、南米留学経験あり。その語学力を生かして防災教育の普及に力を注ぐ。

〈中野元太〉ラ・パス県サンペドロ・マサウアット市役所リスクマネージメント課配属。エルサルバドルの地方都市では唯一リスクマネージメント課を持つ珍しい市。洪水が頻発し、エルサルバドルで最も脆弱な地域とも言われている。時には崖を登り、時にはパンツ一丁で川を渡り、時には海で泳ぎながら任地のリスクを把握、防災に生かしている。

防災ダック　エルサルバドル版

矢守先生や吉川先生を中心に開発された防災ダックが中米エルサルバドルに持ち込まれたのは今から約二年前、初代防災隊員の手によってである。初代防災隊員や前述の坂口隊員、加藤隊員らがこの防災ダックをエルサルバドルで活用していたが、日本語で書かれている点、地震のパートになまずが描かれている点、日常起こりやすい災害が違う点、日常生活で注意すべき点の違いなどからエルサルバドル版に修正する必要が出てきた。ここでその制作の背景を紹介しよう。

「エルサルバドル版に修正するにはやはり現地の方々の意見を」ということで、まずは意見収集を開始した。

ここエルサルバドルには防災をテーマにしたJICAの技術協力プロジェクトがあり、これは中米五カ国で行われている。エルサルバドルでは五市をプロジェクト対象地として活動を行っており、五市を対象にしたワークショップも適宜開催されている。このワークショップには市の防災担当者、国家防災機関である市民防災局の関係者、保健衛生関係者、教育関係者等が出席するため、この場を借りて二度

Capacitan a cinco municipios en gestión de riesgos

Técnicos del proyecto Bosai capacitan a representantes de cinco municipios. Foto Diario Co Latino/Alcaldía de San Luis Talpa

del proyecto Bosai El Salvador, explicó que "el objetivo del Taller de Multiplicadores es el de generar en cada municipalidad un equipo de trabajo para la multiplicación de capacitaciones en las comunidades con mayor índice de peligro durante los eventos naturales".
El Taller, que inició el 26 de julio, tiene una duración de 4 semanas distribuidas entre los meses de agosto, septiembre y octubre.
La temática a impartir es muy variada y va desde: Metodología, Expresión Oral, Primeros Auxilios, Lectura de Mapas, Taller EDAN, Realización de Mapas de Riesgos y otros tantos enmarcados dentro de la Gestión

preparados, fomenta el capacidades este proyect a varios niv educativos aún despu cooperantes preparada". Al términ capacitacior cinco equip que contr comisión capacitació comunidade El Alcalde Roberto Ab muy impor municipalid de capacita potenciali capacidades más vulner Pues, año c las problen

lización de en las

Protección lena, esta necesidad

〈意見収集の様子が新聞にも掲載
JICAプロジェクトワークショップ中にて〉

に渡って意見の収集を行った。そこで出た意見は、「日本ではなまずは地震の象徴だけど、エルサルバドルで思い浮かべるのはなまずのスープだよね」や、「土砂災害が多いから、そういうのも入れたほうがいいんじゃないかな？」などの意見が出た。また、動物に関しても「オリジナルでは火災の際にタヌキが口を覆っている絵だけど、身をかがめている絵にしたほうがいいのでは？」という意見もあり、ここで収集した意見を中心にしながらエルサルバドル版の内容を決めていった。その他にも、国家防災機関である市民防災局の局長や各防災隊員の任地でも色々な方々にインタビューをし情報を集めた。災害に関してのみでなく、日常生活の中で子どもたちに改善して欲しいことなど様々な意見が出、その意見を基にエルサルバドル版の内容を決定、左上の図のようになったのである。

意見収集を経て決定したカードを全てデータ化。今回は描画ソフト「フリーハンド」を使用し、日本版と同じものは日本版をベースに、新たに制作するカードは一から書いた。そして、JICA の隊員支援制度を利用して約一三〇部を印刷、完成するに至った。

さて、この完成した防災ダック、どのように普及活動しているのか、次のコラムに注目である。

災害	動物	メッセージ	備考
地震	ダック	頭を守ろう	日本版からなまずを削除
洪水	カエル	気をつけて避難しよう	日本版に同じ
火事	カメ	口を覆う	タヌキの絵をカメに変更し、身をかがめるイメージを。
大雨	ウサギ	情報に耳を傾けよう	日本版に同じ
津波	トラ	高いところに逃げよう	日本版に同じ
犬による 咬傷（犬に吠えられた際の対処）	ゾウ	大人しくじっとしよう	野良犬が多く、子どもが咬まれる被害が頻発しているため。
蚊（デング熱）	サル	掃除をしましょう	家などをきれいに保っていると蚊も発生しにくい。
挨拶	イヌ	挨拶をしましょう	日本版に同じ
誘拐	トリ	大声で助けを呼びましょう	トリの方が大声で叫ぶという意見からトリの絵に変更。
道を横断	リス	右、左を確認しましょう	日本版に同じ
斜面	クマ	斜面には近づかないようにしましょう	斜面災害が多いため追加。
ゴミ	キリン	ゴミはゴミ箱に捨てましょう	道端にゴミを捨てる習慣があるため、追加。
感謝	ネコ	何かもらったらありがとうと言いましょう	最近の子どもはきちんとお礼を言わないと地域の方々の声。
花火	パンダ	火傷に気をつけましょう	お祭りのときにはよく花火で遊ぶが、爆竹のような花火が多く、火傷、最悪の場合指を失うなどの怪我をする。

コラム「防災ダックの普及活動に迫る！」

防災ダックの普及には細心の注意を払っている。この教材はもちろんそれぞれの学校で使用されることを想定して作成されたものであるが、ただ単に使い方を説明して学校に渡すだけでは普及しない。

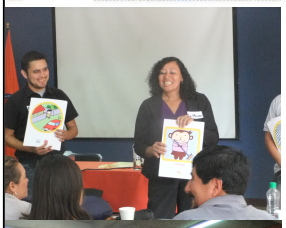
そこで私たち隊員は二つの方法で普及することを考えた。一つは各市に出向している国家防災機関市民防災局の職員を対象にした使用法のワークショップ実施である。この職員らは市レベルで防災活動に専念でき（一般的な市役所は環境課が防災を受け持つなど防災に重点を置いて活動できないことが多い）また学校やコミュニティでの活動も積極的に行うことができる。防災教育に対する意識はそこまで高くないがコミュニティレベルで普及させるには彼らの協力なしでは難しい。

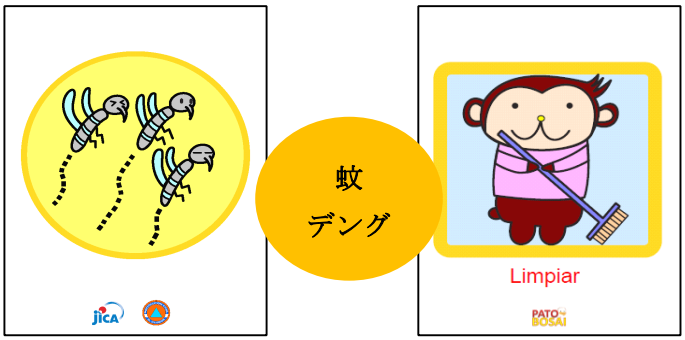
二つ目の方法は、一つひとつ学校を訪れ先生方にワークショップを実施、また実際に先生方に授業で使っていただき、その効果を実感していただいた後に教材を渡すというものである。時間はかかるが、より確実な方法であると考えている。

現在までにエルサルバドルのラ・パス県、ラ・リベルタ県の各市に配属されている市民防災局出向者約三〇名に対して使用方法のワークショップを実施、また一部の出向者と共に学校を訪れ防災ダックを実際に活用した。各学校でも少しずつではあるが先生と共に防災ダックを実施しており、広がりを見せている。

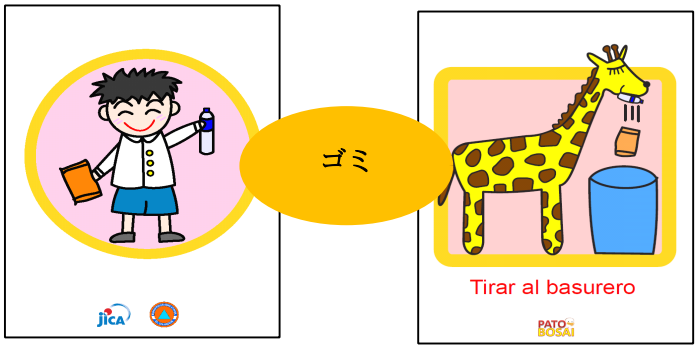
また、グアテマラの国家防災機関である CONRED から防災ダックエルサルバドル版のワークショップを依頼され、防災隊員三名がグアテマラ国を訪問、CONRED 関係者、教育省関係者等を対象に防災ダックの使用方法ワークショップを実施した。また関係者らと共に学校を訪れ実際に子どもたちを対象に防災ダックを実施してもらった。その中で、防災ダックにちなんだ歌が生み出されたりと新たな使い方も見られた。

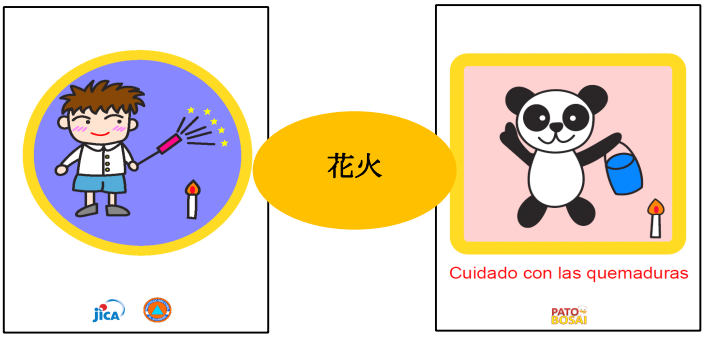
このように、防災ダックエルサルバドル版の普及活動は始まったばかりだが、少しずつ地元の方々の関心が集まるようになり、「次はこっちでもやってよ」という依頼も入るようになった。

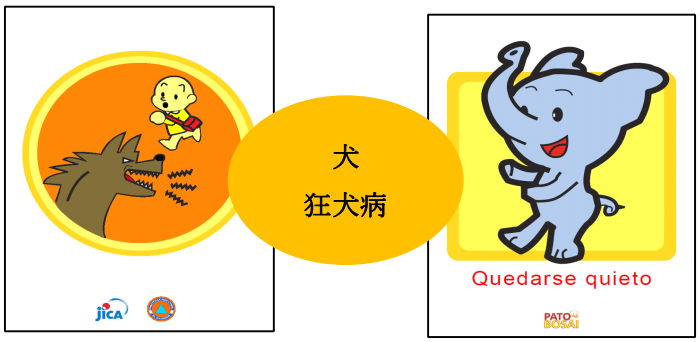


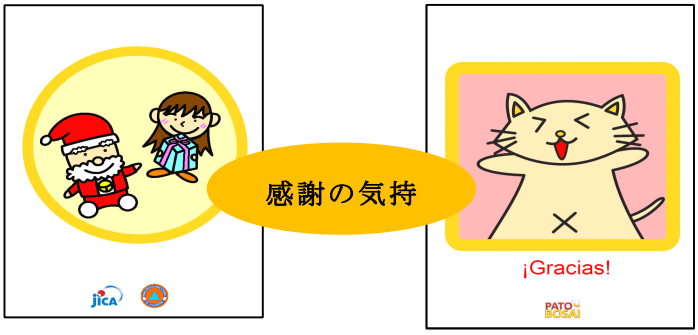


エルサルバドル版　新カード紹介









〈編集後記〉

クロスロード新聞をご愛読の皆様、はじめまして、中野元太と申します。二〇一〇年六月よりエルサルバドルに派遣され早一年が過ぎました。中米と聞かれると、「治安がよくない」という印象を持たれる方が多いと思います。実際にその通り、身近に殺人事件や強盗が発生し緊張することもありますが、エルサルバドル人の人柄は優しく愉快で大らかです。エルサルバドル人に襲われるよりも、エルサルバドルの方々の親切や優しさに触れるほうが何万回も多いということをここでお伝えしておこうと思います。

さて、前述のようにエルサルバドルも自然災害の多発国。地震、津波、火山、ハリケーンや熱帯暴風雨と、頭を悩ませる災害が毎年のように発生しますが、災害の被害を減らそう、災害と共に生きようと日々頑張っている方々がいます。そのような方々の一助になればと、エルサルバドルに派遣されている防災隊員が中心となり、またJICA技術協力プロジェクト関係者、現地の防災関係者等に意見を求めながら、防災ダックエルサルバドル版が完成するに至りました。坂口由華さん、加藤留未さんは今年九月をもって任期を終了し帰国されますが、私はまだ残り一年あります。少しでもエルサルバドルの防災力向上に寄与できるよう日々の活動により一層力を入れていこうと考えています。

至らぬ点が多々ある中、最後までお読みくださりありがとうございました。

〈二〇一一年七月
サンペドロ・マサウアット市にて〉